

# よろずは

平成二八年  
九月号

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです

万葉文化館 おすすめ万葉歌

隼人の

薩摩の迫門を

雲居なす

遠くもわれは

今日見つるかも

万葉集 卷三―二四八  
長田王 をさだのおほきみ

【意識】

隼人の国、薩摩の瀬戸を雲居とまがうほどの遠くに、私は今日見たことだ。

この歌は、もともと次のような漢字で書かれていました。

隼人乃 薩麻乃迫門乎 雲居奈須 遠毛吾者 今日見鶴鴨  
八世紀頃には、まだひらがなやカタカナは無く、外国語の文字であった漢字でやまとことばを書き表していました。平安時代には既にそうした古い書き方が使われなくなり、読めなくなってしまうたようです。その頃から『万葉集』の研究も始まっています。

中でも興味深いのは、「見鶴鴨」とある部分です。「見つるかも」という発音に「鶴」と「鴨」の文字をあてています。歌の内容にはまったく関係のない、鳥のツルとカモを思い浮かべてしまい、なんだか楽しくなります。

同じような発想方法は、現在当館で開催中の「判じ絵の世界―目で見る江戸のなぞなぞに挑戦―」にも見られます。時代は違いますが、日本語の音を分解して再構築するところに共通のしやれつ気を感じます。

ちなみに、この歌は『万葉集』中で最も南の地名が詠まれた歌です。「薩摩の迫門」とは鹿児島県阿久根市と同出水郡長島町との間の海峡を指しています。現在は薄いブルーの美しい黒之瀬戸大橋がかかり、簡単に行き来ができるようになっていますが、当時は潮の流れの速い海の難所として知られていたようです。

【万葉古代学係】